

桜陰俳話会 通信句会 (第百五回 平成二十四年春)

高得点句 自句自解

十一点

② つつかれて浅蜷しばらく鬱になる

小川名みさ

浅蜷の料理が大好きな幼な子が砂出ししている浅蜷をあきずながめていましたが、指でつまみました。浅蜷はしばらく口をとじてしまいましたが、子の様子よりも口を閉ざした貝に近い気持になって作句しました。

② 天守閣蜂一匹の天下かな

増田 守

今はもう主なき城の天守閣。開け放たれた大窓から一匹の蜂が迷い込んできた。刺されまといと息をひそめる見物客を睥睨するように蜂が自在に飛び回っている。天守閣から見渡せる城下町のみならず、領国全域を差配しているような蜂の威勢である。着想はこの春の今治・道後旅行の途次訪れた松山城で得たが、足萎えのため天守閣にまでは登れなかった。

九点

① 若布売り潮染みの声枯らしけり

増田 守

観光客の一人としてぶらぶら歩いているとき若布売りのスタンドを見掛けた。その若布を買おうが買うまいと全くの自由である。しかし、潮染みした声を枯らして懸命に若布を売る姿に近づくにつれて、観光客から日常の生活者の意識に引き戻された。一次産業、二次産業あるいは三次産業のいずれに従事するにせよ、自分を含めて人は皆日々の糧を得るために必死に働いているのである。生産と販売が直結している一次産業であればなおの事である。

八点

① 鎌倉に路地裏多し花海棠

辻 幸子

四月、友人と鎌倉に行った時の句です。段葛を歩き、八幡宮から寿福寺へ。虚子の墓に一礼し、政子や実朝の墓の前で手を合わせました。さらに小さな切通しを抜け路地を行くと板塀の家が続ぎ、ある家の庭に海棠が見事な花を咲かせていてびっくり。しばらく立ち止まっただがめえました。桜や海棠の花を愛でながらの鎌倉散策は楽しいものでした。

七点

⑤ みたまの君耄碌の吾招魂祭

野上 貞勝

昭和十八年、四国松山連隊に在籍中、トラック島に出撃の命令が出る。第一次、第二次の大隊が分かれて輸送が始まる。然し、現地に着く直前に魚雷で沈没し、我が大隊は中止とな

り、連帯は高知に移籍し、その春、東京三宅坂、京都にて終戦す。我が友は藻屑となり、回想すると胸が痛む。

手榴弾飛びぬし街のヒヤシンス

古野 明美

豊富な漁場として知られ、東は響灘、西は対馬海峡・壱岐水道に連なり、冬の風波の激しさで名高い玄界灘。その玄界灘から、湾を渡ってくる初夏の風は、穏やかで心地よい。

湾の中には、大型クルーズ客船、アジア諸国からの貨物船、作業船、漁船、海上保安庁の警備艇などが、行き交っている日常の風景。空は青く澄み、海は美しいマリン・ブルーである。のんびりとした静かな地方都市の一隅に、私は暮らしている、筈であったのだが。シリアでも、パレスチナでもないこの町は、時と場所を選ぶことなく、手榴弾が飛び、銃弾が飛んでくる、闇の勢力の統べなう恐怖の町でもある。彼らは、一般市民だとして容赦はしない。元刑事だとして襲撃に躊躇はしない。治安の悪いこの町で、私はビクビクと怖い思いの中で暮らしている。この句は、私の恐怖心から生まれた一句である。ご近所での抗争事件、今春の普段利用するスーパーの間近かでの銃撃事件には、心底恐怖が走ったのである。そんな、私の心を知らぬ氣に、海道のヒヤシンスが一斉に海風に揺れていた。

茎立や日に日に変わる幼な顔

藤本 友子

最近、衰えが目立つ私の体力、記憶力、集中力に比べ、二歳の孫の成長の速さには、驚かされます。久しぶりに会うと、今まで話せなかった言葉が話せるようになっていたり、身長も急に伸びていたり、顔も母親似だったのが、父親にも似てきたりと成長がはつきり目に見えるのです。そんな様子を「茎立」と取り合わせて句にしました。

六点

③木の芽雨何もしないでよい日かな

佐渡谷秀一

木の芽時は、春の命が動き出すような、何か積極的に動き回りたい時期である。銀色の細かい雨を見ながら、手帳の今日の欄が真っ白だと、自由な行動ができると思い、何となく嬉しい。然し、あれこれ考えても、結局は日がなボーツと過ごしてしまうことにはなるが、それが、今の無理しない体力相応の暮らしだと思っている。

蛍烏賊青き虜囚の光かな

増田 守

蛍烏賊は体の各部に発光器を有し、刺激を受けると青白い光を発する。魚網に捕捉され囚われの身になった蛍烏賊は、その後の運命を予感しているかのように青白く発光するばかりである。弱肉強食の容赦ない社会システムの網に掛かり、喘いでいる人々を暗示しているかのように。